

国内最大の天然ウナギ産地震ヶ浦の再生を求める要望書

茨城県知事 橋本 昌 様

2014年7月17日

いのちの水・霞ヶ浦を守る市民ネットワーク

共同代表 川口玉留

共同代表 飯島 博



ニホンウナギが、国際自然保護連合（IUCN）によって絶滅危惧種に指定されたことを受けて、国や地方自治体によるウナギの保護策や資源回復に向けた取り組みの検討が進められています。

このような状況の中で、1960年代まで日本最大の天然ウナギ産地であった霞ヶ浦（北浦を含む）における取り組みの重要性が益々大きくなっていると云えるでしょう。地元茨城県の積極的な対応が求められます。

霞ヶ浦におけるウナギ保護の取り組みが、ニホンウナギ全体の保護や資源回復の鍵を握っていることは、過去のデータからも明らかです。

シラスウナギの採捕量（全国）は、1960年代に平均で130トンから現在では10数トン（全国）に減少していますが、1960年代には130トンの内の約7割が霞ヶ浦利根川下流部で採捕されています。

同じく1960年代には、全国で漁獲された天然ウナギ約3000トン内の3分の1が霞ヶ浦利根川で漁獲され、さらにその内の半分以上が霞ヶ浦の北浦で漁獲されています。

このように、絶滅の危機にあるニホンウナギの復活には、霞ヶ浦での取り組みが不可欠であることが明らかです。

大型の流入河川が無く56本の中小の河川とその支流、谷津田が、約2200平方キロメートルある流域全体にネットワーク状に広がる霞ヶ浦は、湖と流域全体がウナギの生息環境となっていたと考えられますが、湖や流域と海を結ぶ常陸利根川の河口部に1963年に施工され1973年に完全閉鎖された常陸川水門（逆水門）によって海と湖との交流が遮断されて以降、ウナギの漁獲量は激減しています。逆水門の完全閉鎖以降に起きた霞ヶ浦での漁獲量の激減にあわせるように、全国のシラスウナギの漁獲量減少が起きています（図1）。

これらの経緯から明らかなように、日本におけるウナギ復活の決め手は、霞ヶ浦の逆水門の管理をウナギが移動可能な形に見直すことにあります。

ご存知のように、ウナギ生息地の復活のため逆水門の柔軟運用の実施を求める動きは、すでに流域各地に広がっており、2010年に土浦市議会や阿見町議会、つくば市議会、東海村議会、茨城県市議会議長会などが次々と、この提案を全会一致で採択しています。霞ヶ浦のウナギ産地としての復活は、地域経済にも大きな影響が期待できます。茨城県の活性化という視点からも、霞ヶ浦のウナギ産地復活に期待する世論は日に日に大きくなっています。

最近になって逆水門に魚道が設置されていますが、この魚道設置にあたってシラスウナギは対象外となっています。逆水門が法定耐用年数を越え新たな水門の設置も検討されている今日、逆水門の柔軟運用に加えて、現在設置されている逆水門を海側から湖への流れの管理が可能な河口堰に変更しシラスウナギなどの魚類が遡上できるような構造にすることを求めます。

逆水門の柔軟運用が及ぼす経済的な効果については、2003年にUFJ総研（当時）が算出をしています。短期的には毎年193億円、長期的には毎年308億円の漁業者利益増が見込めるという試算です。その中で、短期予測でウナギは毎年461トン、ヤマトシジミは2516トンの漁獲が見込まれています。その他、マハゼやスズキなどの魚種が湖に戻って来れば、漁業の活性化のみならず、加工業や小売業、観光業などへの経済波及効果が、地域に何倍にもなってかえってきます。同時に、漁業の再生は漁獲による「魚体に含まれる窒素やリンの取り出し効果」で、霞ヶ浦の水質改善にもつながります。

私達は、霞ヶ浦のウナギ復活をとおして環境保全と地域活性化を同時に実現することを目的に、これらを国が募集している国家戦略特区として提案をしています。この提案には、塩害防止の強化策も盛り込まれています（添付資料）。

これらの提案が実現すれば、霞ヶ浦は日本一のみならず世界一のウナギ産地になることも夢ではありません。茨城県のブランド力は一気にアップします。

以上の理由から、以下の要望をいたします。

1. 常陸川水門（逆水門）を、ウナギなが湖と海の間を移動できるように柔軟運用を実施するよう国に要望すること。
2. 逆水門を河口堰に変更し、湖水の流動性を高め、シラスウナギなどの魚類の遡上等の可能なものにするよう国に要望すること。
3. 塩害を防ぎ霞ヶ浦にウナギを呼び戻すことを目的とした国家戦略特区（添付資料参照）の指定を茨城県としても国に働きかけること。

4. ウナギの生息環境を拡大するために、湖内での自然再生や流域の河川、水源地谷津田の自然再生を積極的に進めること。

以上の4項目の申し入れについて、8月17日までに文書にてご回答ください。

連絡先 認定NPO法人アサザ基金事務所

〒300-1222 牛久市南3-4-21

でんわ 029-871-7166

メール asaza@jcom.home.ne.jp

図1

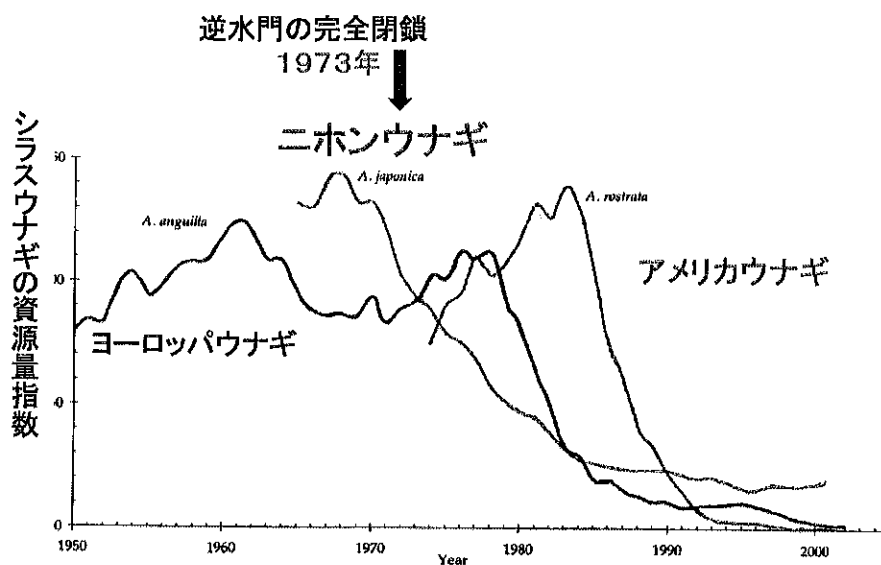


Figure 1 Time trends in juvenile abundance of the major eel stocks of the world. For *Anguilla anguilla*, the average trend of the four longest data series is shown, which trend appears to occur almost continent-wide; for *A. rostrata*, data represent recruitment to Lake Ontario; for *A. japonica*, data represent landings of glass eel in Japan.

流域研究会 立川賢一氏による